

「＜奇跡の聖母＞とペスト行列—近世イタリア都市国家 における集团的嘆願行為と聖母マリア信仰」

新 保 淳 乃

1. はじめに

1632年3月25日、受胎告知の祝日にローマ都市行政府（ポポロ・ロマーノ）はローマ市中を練り歩く盛大な行列を催した¹。職人から、貴族、聖職者にいたる、ローマ社会を構成する市民男性たちの代表がサン・ピエトロ広場からサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂までローマを横切るこの一大宗教行列の中心には、「サルス・ポプリ・ロマーニ＜Salus Populi Romani＞」と通称される奇跡の聖母子イコンと諸聖人とを描いた大記念旗があった²。サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂に収められているこのイコンは聖ルカの筆になる神聖なる画像とされ、ローマの民の健康と安全を守護する奇跡の聖母として篤い信仰を集めていた（挿図1）。聖母大祝日のひとつである受胎告知の祝日に行われたこの記念旗行列は、聖母マリアとローマ守護聖人の特別の守護によってローマがペスト流行の危機を完全に克服したことを公式に宣言するものであった。1629年の夏から数年の間、イタリア各地の都市はペスト流行に見舞われていたが、教皇庁の政治的・経済的・組織的権力を背景に強力な疫病防御策を展開したローマは、公式的には唯一このペストの危機を免れることのできた都市であった。したがって、1632年春の大打撃は、都市社会全体の名において聖母マリアに感謝を捧げこれを称えるための集团的奉獻行為であり、同時に有効な防御対策の遂行と成功の事実を宗教行列の形式において公的に記念するものであった。

本論は、上記の事例に見られるような、近世イタリア都市社会（ローマとフィレンツェを取り上げる）のペスト流行に際して行われた集团的誓願・奉獻行為における聖母図像に帰せられた中心的位置と、疫病からの守護および健康を約すというその特化された役割について考察するものである。

2. 「奇跡の聖母図像」伝統の創造—対抗宗教改革運動とチェーザレ・バロニオ『教会史』の役割

古代から疫病の存在は著述家によって語られてきたが、14世紀半ばの黒死病以降周期的に流行を繰り返した腺ペストは、公衆衛生対策機構の整備や医薬学研究の進展だけでなく、様々な信仰の営みの契機となった。1348年の大ペストの後、突然訪れる死の恐怖を魂の救済の希望へと昇華させるために、集团的行列や定期的ミサ、祈祷、苦行実践、あるいは聖堂、礼拝堂や祭壇の建立や聖画像の制作、ろうそく・灯火用の油や典礼具の寄進など有形無形の信仰行為が多く行われたが、具体的な寄進行為や特定聖人の崇拜と図像化は15世紀初頭以降盛んになった³。中でも、6世紀のローマのペストの際に教皇グレゴリウス一世が行った行列をモデルに繰り返行われたペスト終焉祈願行列は、最も直接的で集团的な嘆願の印であった。これらの宗教行

列は、人間の罪に対する神の怒りを鎮め慈悲を仰ぐための悔悛行為として、キリスト教的救済の最大の象徴である磔刑像や聖体（コルプス・ドミニ）を担ぐ場合と、神への執り成しを諸聖人に嘆願するために聖人聖遺物や聖画像を担ぐ場合とに二分される。11世紀に誕生し14世紀の黒死病直後から盛んに行われた鞭打ち苦行も前者に数えられよう。また「聖カルロのペスト」と呼ばれる1576-77年のミラーノのペストの際に、大司教カルロ・ボッロメーオは「聖なる釘」の受難聖遺物の行列を行って集団的悔悛を神に示そうとした。1611年の聖カルロ列聖後は特に反ペスト守護聖人として、また彼のペスト患者に対する慈善行為とその苦行的祈祷信心ゆえに慈愛と敬虔の美德モデルとして崇拜され多く図像化されている（挿図2）。一方、後者の場合、各共同体の守護聖人や聖セバ스티アヌス、大天使聖ミカエル、聖ロクスなど特定の反ペスト守護聖人と並んで、彼らの上位に位置する存在としての聖母マリアに執り成しと守護を祈願する事例がウンブリアのペスト行列旗を代表として多く確認されている（挿図4参照）⁴。

16世紀の宗教改革における聖母崇拜や聖画像崇拜への異議と否定に対応して、ローマカトリック教会の内部刷新でもある対抗宗教改革運動では、改めてこの二点が教義として正統化された。このような神学議論上の動向と平行して、16世紀の大規模なペスト流行（1510、1528-9、1576-7年）の際には、都市国家単位、あるいは信徒会、教区などの共同体単位で聖母および守護聖人を描いたゴンファローネ、幟を擁した行列が営まれたが、それらの中には「奇跡力を宿す」聖母子画像を行列の中心に据えるという興味深い事例を見出すことが出来る。これらの聖画像には、近世当時の人智では克服できなかった疫病を追放し、当該社会の安全と健康を取り戻す奇跡力を有すとする信仰伝統が伴っていた。より正確に言うならば、疫病の危機を前にした集団的心性が特定の聖画像に奇跡の権能を見出して崇拜の対象としたために、公的な嘆願、感謝を天に示す際にこれら聖画像がその中心に据えられたのである。そのような事例はローマに限定しても少なくとも三件挙げられるが、カトリック教会によって最も権威を認められたのは、冒頭に挙げた「サルス・ポプリ・ロマーニ」の聖母子イコンである⁵。

ペスト祈願行列の原型となった590年のローマの教皇グレゴリウス一世の行列は、「リタニエ・マッジョーレ（大連祷）」の典礼を整備し諸都市に流布する契機となったが、この行列に付随する奇跡伝承が、14世紀以降のペスト関連の行列および宗教的図像の形成に決定的な影響を及ぼした⁶。第一に、剣を鞘に収める天使の幻視が、反ペスト聖人としての大天使ミカエル信仰に結実した。すなわち、サン・マルコ聖堂からサン・ピエトロ大聖堂に向かう途上、グレゴリウス一世は剣を鞘に収める天使がハドリアヌス帝の城壁の上に現れるのを目撃し、この幻視を伴う祈祷行列の直後に、ローマのペスト流行が終わったというものである⁷。この奇跡伝説を記念してハドリアヌス帝墓廟の跡にカステル・サンタンジェロ（聖天使城）が建造され（挿図3）、図像表現においては「剣を鞘に収める天使（大天使ミカエル）」はペストの終焉を意味するものとして定型化された⁸。例えば、ペルージャではベネデット・ボンフィーリ（141c.-1468）の諸作品に代表されるように、15世紀に図像学的に定型化されたペスト行列旗が多く制作された（挿図4）。この行列旗の中心を占める「ミゼリコルディアの聖母」の頭上左右に、剣を振り上げる天使と鞘に収める天使とが描かれている。前者は「神の正義（Iustitia）」すなわち神罰（ペスト流行）を、後者は「神の慈悲（Misericordia）」すなわち神の赦し（疫病終焉）をそれぞれ意味する。

第二に、本論において最も重要な点であるが、6世紀末のグレゴリウス一世の行列において、特定の聖画像が運ばれたとする伝承がトゥールのグレゴリウス、助祭パウロ、助祭ヨハネ、ベージの各著作を通じて正統化された。これを最終的に権威付けたのが、対抗宗教改革においてローマカトリック教会が初期キリスト教会の正統的後継者であることを示した16世紀後半のオラトリオ会士チェーザレ・バローニオの『教会史』である。バローニオの大部の著作第八巻（1599年出版）、西暦590年の記述には、サン・ピエトロ大聖堂への行列の時に教皇グレゴリウスが運んだのは、「現在までプラエセペのサンタ・マリア大聖堂（サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂）に置かれ、信徒が繰り返し訪れて敬意を込めて崇拝している」「大変に崇敬された神の母の聖画像」であったと明言されている⁹。

この対抗宗教改革精神に貫かれた歴史書の記述は、特に以下の点において非常に重要な意味をもつ。まず、大グレゴリウスが大規模な嘆願行列でローマをペストから解放に導いたことを史実として永遠化することによって、キリストの地上の代理人であり第一の使徒ペテロの後継者としてのローマ教皇の権威を強化し、ローマが神の守護下にある聖都であることを強調している。すでにコンスタンティノーブルが「聖母の執り成しによってペストから解放された」特権を享受した前例があったが、大グレゴリウス時代のローマもまた聖母の特別の守護を受けたことが特記されている¹⁰。また、「サルス・ポプリ・ロマーニ」の聖母子イコン崇拝が6世紀末に遡る権威を有すことを示している。すなわち聖画像崇拝とは初期キリスト教会において行われていた信仰形式であり、トレント公会議決議において教義化された聖画像崇拝の正統性を強調している点を看過することはできない。さらに、この聖画像が疫病からローマを守護する奇跡力を有すという信仰は歴史学的には14世紀以降に生まれたものとされているが、6世紀末の行列および聖母子イコンとペスト終焉の奇跡とが「歴史的に」関連付けられていたことは最も重要に思われる¹¹。なぜなら、1632年のペスト克服記念行列において「サルス・ポプリ・ロマーニ」の図像が記念旗に描く対象として選択されるに至るには、バローニオの記念碑的著作による権威化された先例が不可欠であったからである。つまり「嘆願行列後にペストが終焉した」グレゴリウス大教皇の例に倣うことによってはじめ、ローマ市がペストの流行を「阻止」したことを記念する意味が成立したのである。一つの聖母マリア画像は奇跡の力の伝統を付されることによって、ペスト危機の終焉を祝う同時代人のさらなる崇敬を集めたのであろう。

6世紀のペスト行列とこの聖母子イコンとの関連付けは、16世紀末以降にイタリア各地において図像化されることによって信徒の間に流布された。例えば、トスコ＝ロマーノ派のヤコポ・ツッキの作品では画面中央に行列用の輿に入れられた「聖母子」図像が描かれている（挿図5）。また同主題をあらわしたフェデリコ・ツッカロのデッサンでも、ペスト犠牲者の遺体の山の間で「聖母子」イコンを行列する様子が描かれている（挿図6）。1630年のペストで大禍を被ったロンバルディア地方でも、セバスティアアーノ・チーマ（1634-40に記録）が「聖母子」イコンを掲げる行列と剣を鞘に収める天使の出現の主題を図像化している（挿図7）。また1656-7年にペストが大流行した南イタリアでも、磔刑像とともに「聖母子」イコンが行列されている情景が描かれた（挿図8）。

一方、グレゴリウス一世のペスト行列主題は、必ずしも「サルス・ポプリ・ロマーニ」に言及するとは限らない。ローマのトリニタ・デイ・モンティ聖堂には、トレント公会議以前、す

なわち『教会史』出版以前に、レオ十世（1513-21）のフランス大使の委嘱でミケランジェロの弟子が制作した同主題のフレスコ画があるが、教皇（レオ十世が大グレゴリウスとして描かれる）の前に現れる大天使ミカエルの出現のみが取り上げられている¹²（挿図9）。また兄のフランチェスコ・ヴァンニと並ぶシエナ派対抗宗教改革絵画の中心人物の一人であるヴェントゥーラ・サリンベーニ（シエナ1568c-1613）の作品では、天蓋付の行列用台の上に画像が置かれているが、表面が見えないように描かれているため特定聖画像への言及はなされていない（挿図10）。このような場合、グレゴリウスのペスト行列における奇跡的伝承を描いた図像を見るローマ以外の都市の信徒は、それぞれの共同体において崇拜する聖画像と6世紀末のローマの奇跡の聖母像とを同一視して信仰することができたのではないかと考えられる。

3. 疫病終焉祈願行列と「奇跡の聖母」信仰

以上のように、トレント公会議精神に基づいた16世紀後半の著作および造形表現の双方を通してローマのペスト行列と「サルス・ポプリ・ロマーニ」の聖母子イコン崇拜とが結合され、行列による悔悛と聖母崇拜とによってペストが終焉した奇跡が伝統として権威化された。ところでローマとペストの歴史には、別の聖母信仰伝統すなわち「アラコエリの聖母」との繋がりも存在する。ローマの行政中枢であるカンピドリオ脇に建つアラコエリ聖堂の建立と「天の女王」としての聖母信仰は、ティブルティーナの巫女の信託によってアウグストゥス帝に告げられたとされるキリスト降誕と異教追放についての民間伝承に由来している¹³。この皇帝の幻視では空が開けて祭壇上に腕に幼児を抱いた聖母が出現し、〈Haec Ara Filii Dei est〉（この祭壇に神の息子あり）の声が聴こえたことを記念して、カンピドリオの丘に聖堂を記念して「アラコエリ（天の祭壇）」と命名したとされている。1348年の黒死病の年には、124段の大理石階段が寄進として建設された。深刻なペスト時には、6世紀に遡るとされる「アラコエリの聖母」図像と15世紀に作られた「奇跡の幼児イエス」像とが信仰を集め、ポポロ・ロマーノによる嘆願行列で運ばれた（挿図11・12）。

ローマのペスト行列で運ばれた第三の聖母図像は、サンタ・マリア・イン・カンピテリ聖堂の「ポルティコの聖母」である。同聖堂の場所は古代にはマルス神殿と、戦争の女神ベローナに献じられた円柱があり、敵国の戦争時にはこの円柱上に見張りが立ち槍を投じたとされる。後に神殿と円柱の間の広場にアポロン神殿が建てられ、キリスト教化後はその跡に聖母に奉献した聖堂が建立されローマ市民の特別な信仰対象となった¹⁴。17世紀後半にサンタ・マリア・イン・ポルティコ聖堂から本聖堂主祭壇へ移された聖母子画像が、疫病に対する奇跡の力をもつとして信仰されている（挿図13）。6世紀のイコンを石細工に写したとされるこの聖画像には、左右二本の檜の木の間祝福するキリストを抱いた聖母が表されており、グレゴリウス七世（1073-85）による聖櫃に刻まれた「神の母マリアの聖なる図像」の銘文と一致することから11世紀末にはすでに信仰対象となっていたことが分かる¹⁵。1630年のペスト危機および1656-7年のペスト流行の際には、「ポルティコの聖母」の庇護によってローマが救われたとして、ポポロ・ロマーノ両院によってペスト行列（1630年）、祭壇装飾および新聖堂建立（1656-75年）の公式誓願が奉じられた。

4. 神罰としての疫病、美德の鏡としての聖母マリア：社会道德

以上のように「奇跡の聖母子図像」信仰とペスト終焉祈願・感謝行列とが結合した事例には、「神の母」聖母マリアに寄せられた信徒民衆の特別の信仰心を看取できる。ところで、ペスト流行時における突然死、大量死に対する集団的恐怖心は、なぜ聖母マリア崇拝に向かったのだろうか。まず始めに、最も正統的な疫病解釈であった神学的な、同時に社会道德的な説明によれば、疫病とは人間の犯す罪に対して怒った神が悔悛させるために地上に送る神罰である。疫病時の道德的退廃については、トゥキュディデスや14世紀のボッカッチオが描写している。14世紀の黒死病に先立つ疫病であったハンセン氏病のように肉体的症状が顕著な病については、肉に関する罪すなわち肉欲や大食の罪が原因であり、告解や祈祷、善行を通して罪を悔悛することによって神罰である病も治癒すると説明された¹⁶。また6世紀の教皇グレゴリウス一世、16世紀の聖カルロは、人々の宗教的墮落を諷める説教を通して神の怒りを鎮めるための集団的悔悛行為に向かわせた。疫病の第一原因とされた道德的墮落の罪を贖うために、完全な美德の鑑として称えられたのが神の母にして処女聖母マリアであった。

人類の中で唯一原罪を免れ天に揚げられた存在としてマリアを崇める無原罪受胎神学に裏打ちされた聖母の美德信仰と結合したペスト奉献画は、トレント公会議以降特に顕著に見られる。北イタリア対抗宗教改革絵画を代表するヤコボ・パルマ・イル・ジョーヴァネ（1548c.-1628）のペスト奉献画（1620年代）においては、二大反ペスト聖人の聖セバスティアヌスと聖ロクスを介して無原罪受胎の聖母に贖罪の執り成しを嘆願しペスト終焉を祈願または感謝する信仰心が明確に表現されている（挿図14）。画面中心を占める聖母は上弦の三日月にのり、胸の上で両手を交叉させて神意に対する従順を示す身振りで、前景で執り成しを願う二聖人と観者の方へ視線を降ろしている。周囲には、その無原罪を象徴する「傷のない鑑」「白百合」「オリーブ」などを持つブットが飛翔し聖母の美德を強調している¹⁷。また、1676年にペストが猛威を振るったマルタ島では、無原罪の聖母と諸聖人にペスト終焉の執り成しを嘆願するために、マルタ騎士団が無原罪受胎の聖母に奉献した聖堂の建立および装飾を行った。円形の聖堂デザインおよび絵画装飾を行った騎士団員の画家マッティア・プレーティ（1613-1699）は、地上に横たわり救いを求めて腕を掲げるペスト犠牲者の病んだ肉体の山のうえに君臨する「無原罪の御宿り」を配した主祭壇画を描いている（挿図15）¹⁸。聖母の両脇には剣を鞘にしまう天使が描かれ、ただ一人原罪を免れた聖母の美德とその執り成しによって地上のペストが終焉することを示している。この作品は、煉獄で浄罪の火に焼かれる魂を救済する「煉獄の聖母」と図像形式を同じくしており、罪の結果としての病から人類を救済する聖母の権能が無原罪に拠っていることを意味している。これらのペスト奉献画に看取できるように、ペスト奉献画における聖母は信徒による執り成し嘆願の対象であると同時に、模範的道德的モデルを体現することで宗教的社会的秩序安定に貢献する役割も果たしていたと考えられる。

1629年からのペスト危機に晒され全市を挙げて防御対策を敷いていたローマにおいても、これら行政策に直接的に関与しない下層民衆は、教区教会や信徒会の催す反ペスト典礼・行列を通して聖母マリア信仰に救済を嘆願した。例えば1630年6月24日にサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂付属ロザリオ信心会は、ミネルヴァ、サンタ・マリア・デル・ポポロ聖堂、サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂の聖母信仰主要拠点を巡行するロザリオ祈祷行列を行って

いる¹⁹。北イタリアからの疫病拡大の危機の最中に聖母への祈祷行列を行うことによって、信徒民衆は恐怖心と不安を救済の希望に転換させ、聖母マリアに精神的癒しを見出したのではないだろうか。

5. 自然界を支配する聖母マリアー「インプルネータの聖母」における大地母神信仰の継承

人間の罪に対する神罰という神学的解釈は常に第一義的なペスト論であったが、古代ギリシャ自然科学以来の自然要因説も二義的原因としてキリスト教著述家に受け入れられた。18世紀のペスト菌発見以前は、惑星の合や日食、月食による四元素の不均衡、あるいは地震や河川氾濫などの自然災害が大気を腐敗させて疫病を引き起こすと考えられていた²⁰。上述のバローニオ『教会史』にも西暦680年7月の「月食の後にローマにペストが流行した」と書かれている²¹。このような自然界の変動が引き起こすとされた疫病に対して、流行終焉と治癒の奇跡力を宿す「奇跡の聖母子図像」への特別の信仰を1340年代以降のフィレンツェに見出すことが出来る。

フィレンツェの南方10キロの地点に、エマ、グレーヴェの二河川氾濫を避けて開かれた道路上の丘に「インプルネータ（Impruneta=In Pineta 松林の）の聖母」を祀る聖地がある。この地域一帯は紀元前六世紀エトルリア時代に遡る治水と治癒力を司る神性信仰が盛んであったが、その一つであるインプルネータは古代ローマ時代まで「健康の神性」を祀る聖地であった。1-2世紀のキリスト教化を経て、11世紀の教区設置の後、黒死病が猛威を振るった1340年代に聖画像が「地中から発見」され、フィレンツェ守護者としての信仰が開始された²²（挿図16）。水害、旱魃、飢饉、疫病、政変などフィレンツェが守護者を必要とする「危急の危機」に際して、「インプルネータの聖母」は覆いを外されてフィレンツェまで行列して運ばれ嘆願対象として崇拜され、集団的恐怖心を鎮める役割を担った。

この聖画像に対する第一義的信仰は、降雨、豊穡など自然界の事象に関する奇跡力を発揮するというもので、「地中から」発見された伝承にも見られるように少なくともエトルリア時代に遡る大地母神信仰を継承していることは明らかである。自然界を司る他にも、1499年にはサヴォナローラ派市民が市政府の政策を正すために、また1529年には神聖ローマ皇帝軍の侵攻の危機回避を嘆願して聖母画像がフィレンツェに運ばれるなど、共同体の政治的危機における信仰高揚もみられるため、自然界と人間界の双方を支配する政治的大地母神に似た崇拜対象であったといえる²³。さらに、この聖母子画像は疫病に対しても奇跡力を発揮するとされた。1527年にペストが流行するとフィレンツェ市政府が「インプルネータの聖母」を市内へ行列して運び入れ、冬の到来とともに流行が止むと信仰はさらに拡大した²⁴。1630年のペストの時にはこの「聖母の執り成しによってフィレンツェからペストが追放されたこと」を記念して、インプルネータの聖母聖堂に回廊が建設されている²⁵。

興味深いことに、古代フロレンティアの主神マルスの騎馬像が、水の支配者、氾濫の番人として中世フィレンツェにおいて信仰されており、1333年の大洪水によってこの像がアルノ河中に流された直後に、「インプルネータの聖母」が「発見され」信仰が始まっている²⁶。したがって、エトルリア時代の健康の神性への信仰と、古代ローマ以来の治水神マルス信仰の両者の統合として、この自然界を司る奇跡の聖母画像崇拜が成立したことが分かる。上述したローマの「ポルティコの聖母」が古代マルス神殿、アポローン神殿跡周辺で崇拜されたことを考えると、

インプルネータの例と同様に大地母神信仰の跡を留めている可能性もある²⁷。インプルネータの聖母信仰に明らかなように、河川氾濫、旱魃による飢饉や疫病の危機において信仰された聖母とは、自然界と生物の生死を統べる大地母神信仰のキリスト教的形態に他ならない。

6. 結 論

人間の罪に対する神罰として、あるいは自然界の変動による大気腐敗の結果として解釈されたペスト流行の危機において、近世イタリアの人々が「聖母マリア」図像に寄せた「奇跡力」崇拝と、それを行列することで集団的な悔悛と慈悲嘆願の印を神に示す宗教的営為は、医学や検疫機構整備等の人間的対策と、いわばコインの表裏をなすものであった。ペスト奉獻画に描かれたように鼠蹊部をはじめ体中にリンパ腺腫が現れる身体的症状を引き起こす腺ペストは、肉の罪に対する神罰として恐れられ、突然の大量の死をもたらすことへの集団的恐怖心は、超自然的神性の執り成しと慈悲の希求へと収斂した。罪の悔悛による疫病終焉を嘆願する信徒たちの行いは、美德の鑑であり、神の母である聖母マリアによって最も有効に神に執り成されるとする聖母信仰を高揚させた。さらに、自然界の生死を司る大地母神信仰を継承した奇跡の聖母子図像信仰に見られるように、聖母は疫病そのものにも影響力を及ぼす強力な神性として崇拝された。

これら疫病に関する聖母崇拝において中心的位置を占めたのが、集団的誓願・嘆願の行いとしてローマやフィレンツェの都市内を行列して運ばれた「奇跡の聖母子図像」であった。ローマにおいて最も権威と信仰を集めた「サルス・ポプリ・ロマーニ」の聖母子イコンは、16世紀の対抗宗教改革精神に裏打ちされた著作およびそれに基づく表象文化を通して、6世紀の教皇大グレゴリウス以来の伝統と、ペストに対する奇跡的治癒力とを具現するものとして権威化された。美德の鑑であり、大地母神的権能を有す神の母マリアは、1632年にはついに、「聖都ローマをペストから防御し、疫病に勝利」という奇跡を成就した。ペストの脅威を前にした近世イタリア都市の人々による「奇跡の聖母」行列という集団的信仰実践は、処女にして神の母という特権を享受した聖母マリアに、疫病の追放者、治癒者としての奇跡の力を見出し、かつ与えたのである。

¹ Gerardi, Antonio, *Sommatoria Relatione della Solenne processione dello Stendardo benedetto dalla S. tà di N. S. Urbano VIII. fatta dal clero, e Popolo Romano....*, Roma, L. Grignani, 1632. Cfr. Nussdorfer, Laurie, *Civic politics in the Rome of Urban VIII*, Princeton, Princeton UP., 1992.

² ピエトロ・ダ・コルトーナによって制作されたこの記念旗の表には、イコンの模写とローマの守護聖人である聖ペテロ、聖パウロ、ローマ都市景観、裏には同様のイコン模写と反ペスト聖人の大天使聖ミカエルと聖セバスティアヌスが描かれていた。Gerardi, A., *Sommatoria Relatione...*, Roma, 1632参照。記念旗は逸失。

³ Biraben, Jean-Noel, *Les hommes et la peste en France et dans les pays européens et méditerranéens*, 2 Toms., Paris, Mouton-LeHaye, Tome II, 1976, pp. 63-83.; Cohn, Samuel K., Jr., *The cult of remembrance and the Black Death. Six renaissance cities in central Italy*, Baltimore and London, The Johns Hopkins UP., 1992, pp. 205ff.

⁴ AA.VV., *Un pittore e la sua città. Benedetto Bonfigli e Perugia*, a cura di Vittoria Garibaldi, catalogo della mostra, Milano, Electa, 1996.; Mancini, Francesco Federico, *Benedetto Bonfigli*,

Milano, Electa, 1992. ; Crawford, Raymond, *Plague and pestilence in literature and art*, Oxford, Clarendon Press, 1914. ; Frangi, Giuseppe, *Foppa. Lo Stendardo di Orzinuovi*, Brescia, Grafo edizioni, 1977.

⁵ <Salus Populi Romani> (Roma, Santa Maria Maggiore) ; <Madonna di Aracoeli> 6世紀? (Roma, Santa Maria in Aracoeli) ; <Madonna in Portico> 6世紀? (Roma, Santa Maria in Campitelli) 他の二例については後述する。

⁶ Moroni, Gaetano, *Dizionario storico ecclesiastico...*, Venezia, 1852-, vol. 10, p. 177. ; vol. 12, pp. 114-115. ; vol. 39, pp. 10-14. ; vol. 52, pp. 221-223.

⁷ *ANNALES ECCLESIASTICI AVCTORE CAESARE BARONIO SORANO EX CONGREGATIONE ORATORII S. R. E. PRESBYT CARDEINALI TIT SS NEREI, ET ACHILLEI ET SEDIS APOSTOLICAЕ BIBLIOTHECARIO*, TOMVS 8, ROMAE, ex Typographia Vaticana MDXCIX. De Superiorum concessione, p. 6. 《Tunc vero & mirandum illud accidisse tradunt, vt cum peruenisset procedendo Gregorius ad molem Hadriani Tiberi adiacentem, in signum reconciliati numinis, visus fuerit Angelus nudatum gladium in vaginam reponere, eoq. symbolo morbum cessasse significare voluisse》(強調引用者; 以下同様)

⁸ 14世紀以降の図像表現の源泉となったヤコブス・デ・ウォラギネの『黄金伝説』においても、剣を鞘に収める大天使ミカエルの出現は「ペスト終焉の象徴」とされている。Cfr. Polzer, Joseph, "Aspects of the Fourteenth-Century Iconography of Death and the Plague", in: *The Black Death. The Impact of the fourteenth-century Plague*, New York, Center of Medieval and Early Renaissance Studies, 1982, pp. 107-130, pp. 114-6.

⁹ Baronius, Cesare, *ANNALES ECCLESIASTICI*, TOMVS 8, ROMAE, MDXCIX., p. 6. 《Habent veteres Rituales libri (vt vidimus) vltimis litanis esse processum ad basilicam Apostolorum principis Petri, atque ab eodem Gregorio sanctam imaginem Deiparae magna veneratione delatam: fuisse autem illa traditur, quae hactenus extat in basilica S. Mariae ad Praesepe, & a polulo honorifico cultu frequentatur: eam tunc a S. Gregorio in processione delatam》

¹⁰ Baronius, C., *ANNALES ECCLESIASTICI*, TOMVS 7, MDXCVI, p. 330 E-331 A-D 東ローマ皇帝ユスティニアヌス一世治世中の544年のオリエントのペストの際に、聖母マリアの執り成しでコンスタンティノポリスがペストから救われたことを記念して、聖母マリアの御潔めの祝祭広まった (festa di Purificazione)。皇帝はこれを記念して聖ソフィア聖堂を建立し聖母に献堂した。

¹¹ Crawford, R., *Plague and pestilence in literature and art*, 1914, pp. 88-93.

¹² シチリア出身のヤコポ・シクーロ、またはM・マイーノに帰属。前景の教皇の大外衣にはグレゴリウス一世の紋章の下にメディチ家教皇レオ十世の紋章が描き込まれており、両者が同一視されていることが分かる。また注文主が聖ミカエル騎士団員であったため本作、および聖ミカエルが遣わしたガルカノの牡牛の伝説を描いたルネッタにこの主題が選ばれたと考えられる (*Chiesa e convento della SS. Trinita dei Monti in Roma*, testo di L. Salerno, Bologna, Grafica, 1968, p. 11.)。ただし左袖廊礼拝堂にはフェデリコ・ツツカリによるフレスコ画「アウグストゥス帝と巫女の選択 (アラコエリの聖母の伝承)」(1589) が描かれているため、ペストと関連する可能性もあろう。

¹³ Moroni, G., *Dizionario storico ecclesiastico...*, vol. 12., pp. 94-95. アウグストゥス帝時代にアポロンの神託の巫女はいないため、これは後世の伝承であることは明らかである。

¹⁴ Moroni, G., *Dizionario storico ecclesiastico...*, vol. 12., pp. 99-102. マルス神殿と円柱の間の小広場から、カンピテッリ (Campitelli) と称された。アポローン神殿はローマ元老院が属国からの大使を迎える場として機能した。

¹⁵ Moroni, G., *Dizionario storico ecclesiastico...*, vol. 12., pp. 157. <Haec est illa pia Genitricis imago Mariae, Quae discumbenti Gallae patuit metuenti> (これはかくも崇敬なる母マリアの像である そこには檜の木が枝を広げ威光を放つ)

- ¹⁶ Palmer, R., "The Church, leprosy and plague in Medieval and early modern europe", in: *The Church and healing*, ed. by W.J. Sheils, Oxford, Basil Blackwell, 1982, pp. 79-99, pp. 82-86を特に参照.
- ¹⁷ 本作は「無原罪の御宿り」の「教義」を図像化した最初の例の一つであるとされている。その図像学は1556年にローマで出版された《Revelationis Extravagantes》の挿図版画に拠っており、マソン・リナルディはバルマ・イル・ジョーヴァネがローマでこの文献を知っていたとしている。Mason Rinaldi, Stefania, *Palma il giovane*, Milano, Electa, 1984, p. 107.
- ¹⁸ Spike, John T., *Mattia Preti. Catalogo regionato dei dipinti*, Taverna, Centro Di, 1999, pl. LXXII., cat. 41. 1 (pp. 138-142.)
- ¹⁹ Nussdorfer, L., *Civic politics in the Rome of Urban VIII*, pp. 141ff.
- ²⁰ Biraben, Jean-Noel, *Les hommes et la peste*, Paris, Tome II, 1976, pp. 8ff.
- ²¹ Baronius, Cesare, *ANNALES ECCLESIASTICI*, TOMVS 8, ROMAE, MDXCIX., p. 542 D 《DE PESTE QVAE IN ITALIA GRASSATA EST. // Hoc anno mense Iulio post Lunae eclipsim pestis ingens vastauit Urbem & alias nonnullas Italiae ciuitates》
- ²² Cardini, Franco, "Introduzione: Il culto di Santa Maria dell' Impruneta fra antropologia e storia", in: *Impruneta. Una pieve, un santuario, un comune rurale*, Firenze, Francesco Papafava editore, 1988, pp. 1-6.; Herlihy, David, "Santa Maria Impruneta: una comune rurale nel tardo Medioevo", in: *ibid.*, pp. 7-46, pp. 7-12.
- ²³ Trexler, Richard C., "Florentine religious experience: The sacred image", in: *Studies in the Renaissance*, vol. XIX, New York, 1972, pp. 7-41, pp. 15-18.
- ²⁴ Crawford, R., *Plague and pestilence in literature and art*, 1914, pp. 145-146.
- ²⁵ *Guida d'Italia. Firenze e provincia*, Milano, 1993, pp. 684ff.
- ²⁶ Trexler, Richard C., "Florentine religious experience: The sacred image", pp. 23-25.
- ²⁷ しかし筆者は、現在のところポルティコの聖母にみられる二本の檜の木の間に座す図像形式を大地母神信仰図像の中に見出すことは出来ていない。

【図版目録】

- 挿図1: 「サルス・ポプリ・ロマーニ」, Roma, Santa Maria Maggiore, Cappella Paolina
- 挿図2: ピエトロ・ダ・コルトーナ「ペスト終焉のために聖釘を行列する聖カルロ」, 画布に油彩, 1650年, Roma, San Carlo ai Catinati (主祭壇)
- 挿図3: 「剣を鞘に収める大天使ミカエル」, ラッファエッロ・ダ・モンテルーボのデザイン(1544年)に基づく青銅像, 1752年, Roma, Castel Sant' Angelo
- 挿図4: ベネデット・ボンフィーリ「アル・プラートのゴンファローネ(怒れるキリスト, 二天使, ミゼリコルディアの聖母と聖ベルナルディーノ, 聖フランチェスコ, 司教聖コスタンツォ, 聖ラウレンティウス, 司教聖セヴェロ, 司教聖ルドヴィーコ, 殉教者聖ピエトロ, 聖セバスティアヌス, ベルージャ都市景観)」, 画布にテンペラ, 290×180cm, 1453-54年, Perugia, Convento di San Francesco al Prato.
- 挿図5: ヤコポ・ツッキ「グレゴリウス一世(?)の行列」168×128cm, Musei Vaticani, Inv. 374.
- 挿図6: フェデリコ・ツッカロ「大グレゴリウスのペスト行列と幻視」, 茶インク, 赤チョーク, 269×159mm, Munchen, Graph. Samml., Inv. 1949: 29.
- 挿図7: セバスティアノー・チーマ「聖グレゴリウスの行列」画布に油彩, 100×200cm, Cisano Bergamasco, San Gregorio
- 挿図8: アンジェロ・ソリメーナ(1629-1716)「ローマのペスト」, 1698年, 画布に油彩, Sarno, Duomo
- 挿図9: ヤコポ・シクーロ(?)またはM・マイーノ(?)「ハドリアヌス帝の城壁上の大天使聖ミカエルの

出現」, フレスコ, 16世紀初頭, Roma, Torinita dei Monti, 右袖廊右壁

挿図10: ヴェントゥーラ・サリンベーニ「悔悛する大グレゴリウスとローマ」, Perugia, San Pietro (右身廊)

挿図11: 「アラコエリの聖母」, 6世紀, Roma, Santa Maria in Aracoeli, 主祭壇

挿図12: 「アラコエリの奇跡の幼児イエス」, 15世紀, Roma, Santa Maria in Aracoeli, Cappella di S. Bambino

挿図13: 「ポルティコの聖母」, Roma, Santa Maria in Campitelli

挿図14: ヤコボ・パルマ・イル・ジョーヴァネ「無原罪の聖母と聖セバスティアヌス, 聖ロクス」, 画布に油彩, 300×165cm, 1620-28頃, Savincenti (Jugoslavia), 教区聖堂

挿図15: マッティア・プレーティ「無原罪の御宿り」(聖堂装飾連作), 画布に油彩, 418×259cm, 1677-78年, Floriana (Isola di Malta), Immacolata Concezione detto di Sarria (主祭壇)

挿図16: 「インプルネータの聖母」, Impruneta (Firenze), Santa Maria Impruneta



fig. 1

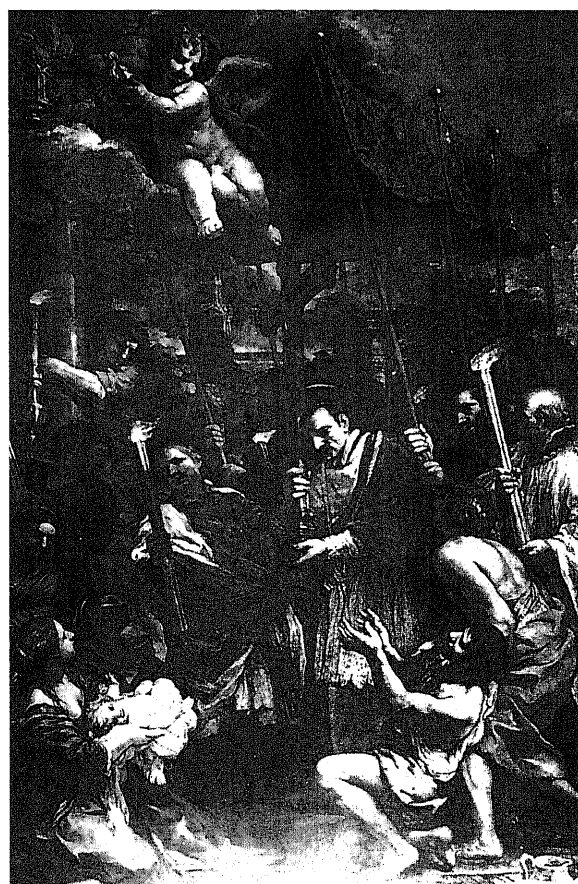


fig. 2

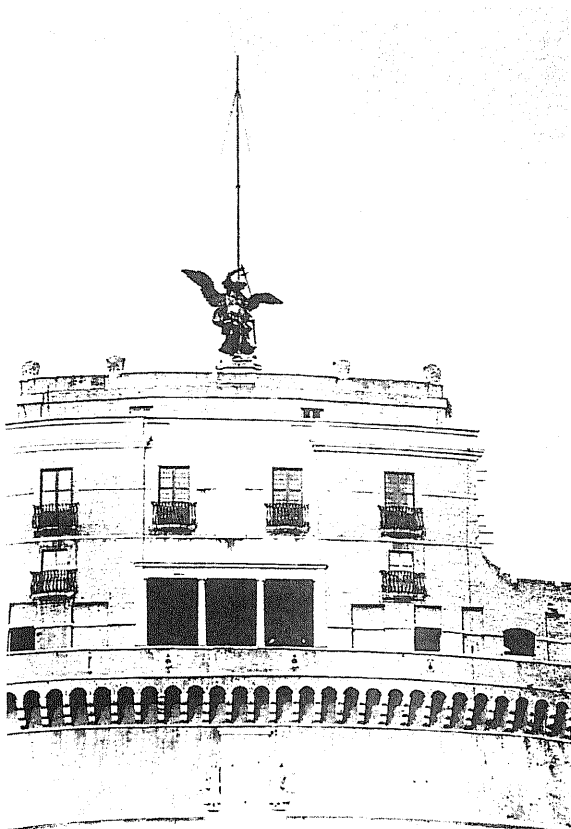


fig. 3



fig. 4

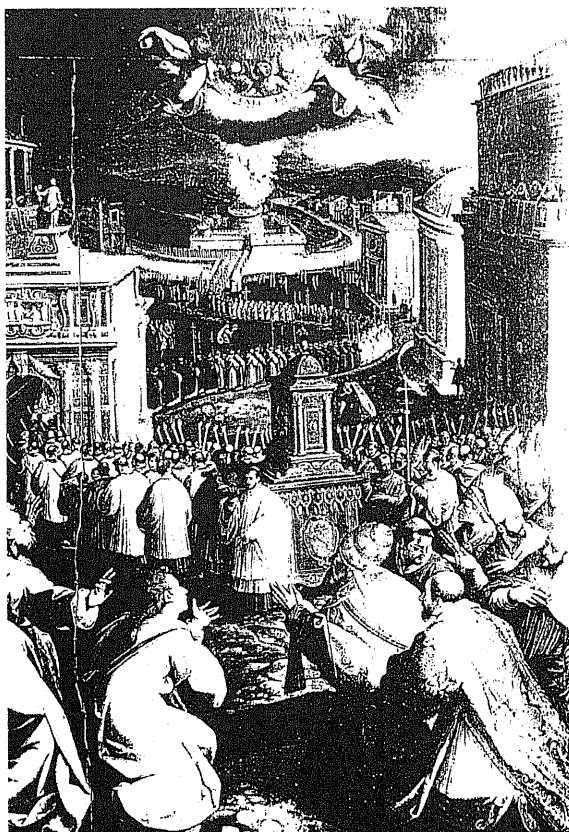


fig. 5



fig. 6

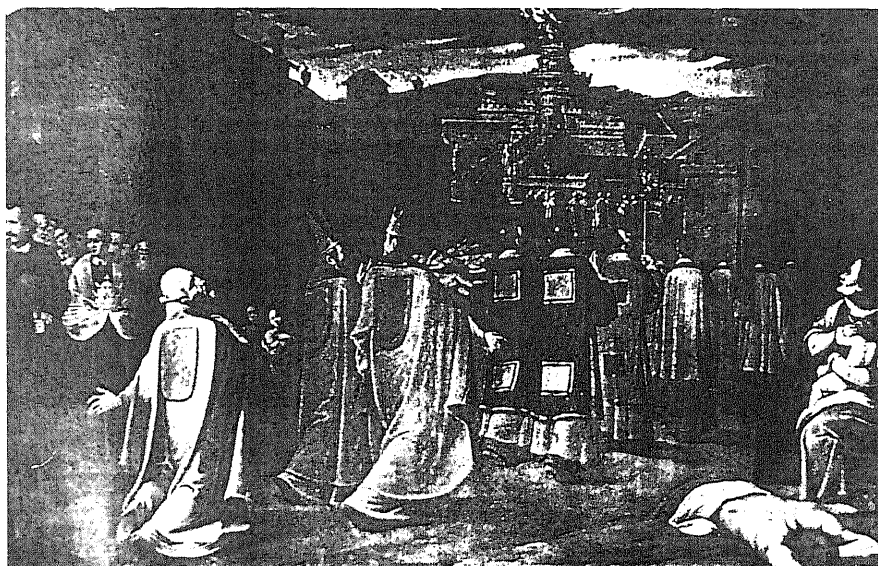


fig. 7



fig. 8

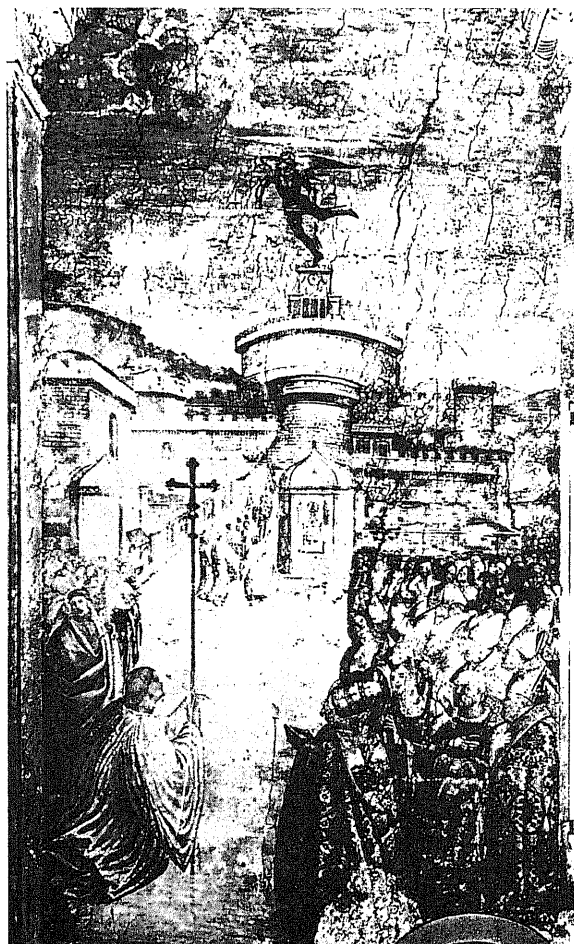


fig. 9

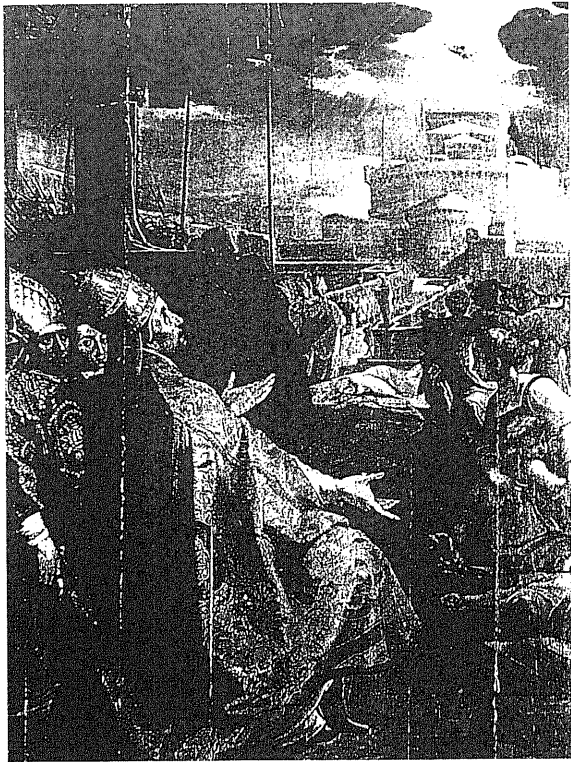


fig. 10



fig. 11



fig. 12



fig. 13

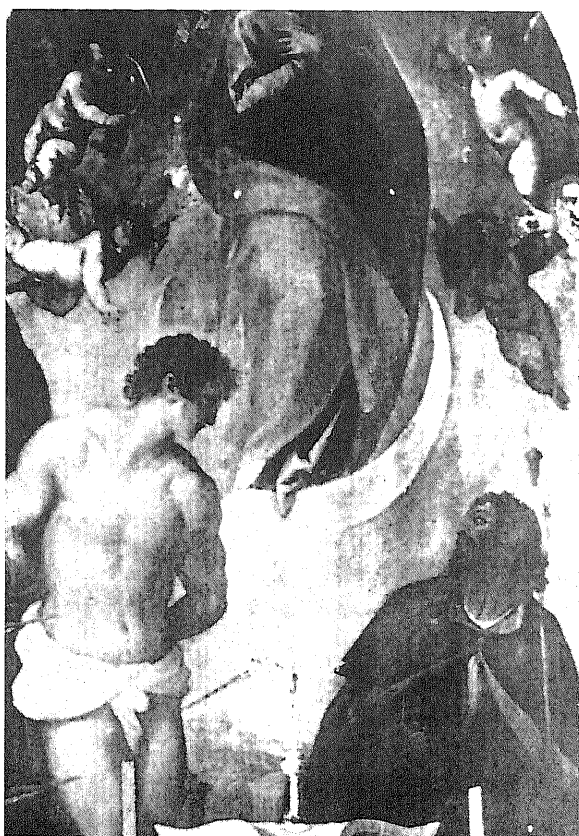


fig. 14



fig. 15



fig. 16